
賭博伝説 カズヤ

A T U

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

賭博伝説 カズヤ

【Nコード】

N4314I

【作者名】

ATU

【あらすじ】

麻雀、トランプ、サイコロ…

全て平等のはずの「ギャンブル」で、運命を意のままにする男が現れた…！

プロローグ：前振り（前書き）

皆様、初めまして！

この小説は、作者の初めての作品になります。

月並みですが、拙い内容ですが、

お付き合い下されば嬉しいです。

あと一つ。

この小説は、麻雀などのルールについては説明を致しませんので、
分からない方は大変読みにくいと思われます。

そのところをご理解頂きたいです。

それでは！

本編、始まりです！

プロローグ：前振り

麻雀、トランプ、サイコロ…

いわゆる、ギャンブルに値するもの

それは実力どころではなく、`運`が勝敗を決める

勝負は全て平等

しかし

その常識を覆す男がいた。

ギャンブラーカズヤ

彼は運を、`操作`する…

ブログ：前振り（後書き）

はい。

この短さでは、本編とは言えないっスね…

まだです。

まだ見捨てないで！

近日中に次を載せますので、

まだ見捨てないで！

第1話・神速の賭博師（前書き）

はい、どうも。

まだ連載してまもないので

まずは本編をどうぞ！

第1話：神速の賭博師

この日は、天気が悪かった

濃い灰色の雲からは一点の光も見えず、ともすれば雨さえ降りそうな

そんな空だった

きっと外では、強い風が吹いているのだろう

そう

外では…

「さあ！丁か、半か！」

「裏ドラは…東だ！」

俺のいる建物はこんなざわめきの中で、風の音など聞こえない

ただ、ジャラジャラとチップを動かす音だの

勝った、負けたの歓声やら悲鳴やらが響くばかりである

ここは、都内某所の賭金カジノ

いわゆる、違法の賭場。

俺は胸ポケットから、煙草とライターを取り出し、火をつけ

隅のほうのソファに腰を落とした

俺は、ここに金を動かして来た訳ではない

あるモノを、奪り返しに来たのだ

「麻山あさやま、そろそろ出番だぞ」

黒スーツの、ガタイのいい男に促され、俺…麻山 純白ましろは立ち上がる

「ああ…」

返事をしたことだけ明らかにして、くわえたばかりの煙草を消した

「…こつちだ」

黒スーツの男があと二人やって来ると、俺は、カジノの真ん中にある
ステージへ向かう

「お客様、何かドリンクはいかがでしょう？」

バーテンの格好をした、派手な頭の青年が、グラスを大量に乗せた
お盆をこちらへ向けた

ヘアワックスでライオンのように固めた、いかにも最近の若者、と
いった男だ

…チップ目当ての営業スマイルが気に入くわない

こちらら、ステージ前でピリピリしているというのに

「そうだな…82度の焼酎と6度のマティーニと常温のワイン、フ

アンタグレープにバーボンとウイスキーにスコッチを2：3：5：5：2：4：1：2：3でちゃんぽんにして持って来てくれ」

そう言うと、純白は返事を待たずに再びステージへ向かう。

「…はい、82度の焼酎と6度のマティーニと常温のワイン、ファンタグレープにバーボンとウイスキーにスコッチを2：3：5：2：4：1：2：3でちゃんぽん」

「ですね？お客様」

「！！！！」

「…麻山。早くしろ」

気が付くと、そのバーテンは居なくなっていた

「さあさあ、皆様！！！」

ブウンと一唸りして、スピーカーが大音量の挨拶を吐き出した

司会者のえんぴ服の中年は、続ける

「今夜もこのステージで行われる“勝負事”の勝敗に、皆さん存分に賭けようではありませんか！」

そう

それが純白がここにいる“目的”であり、

ステージ上空にいる、まるで動物のように檻に入れられた少女が

彼がここにいる理由。

「お兄ちゃん！助けて！」

「ああ、安心して、待ってる！！！」

そう言うとステージ中央にある

麻雀卓に座った

「今日の“勝負事”は…王道、麻雀でございます！」

ワッと、場内が沸く

「今日のゲストは見ての通り！賭博師“神速の純白”です！」

そう

どんな博打でも、五順以内にアがる“イカサマ”賭博師

それが麻山純白である

「そして純白の対戦相手は…」

「プロ雀師、“鉄壁の六道”！！」

六道…

彼もまた、裏では名前の知れた賭博師

そして、

純白の妹を奪った張本人

まさしく、因縁のカードなのだ

「フフ…麻山、純白…」

人差し指のない六道が、代わりに中指を向けて話し掛ける

「お前の麻雀は、おでは通用せん…前にそう、言わなかったか？」
言い返そうとしたが、マイクのハウリングが遮った

「皆様、今日はこの二人の対決ですが…二人打ちなんて、つまらないでしょう？」

会場が静まり返る

「そこで」

「この会場のどなたでも、この二人のチームになってもらいたいと思います…」

歓声がざわめきに変わる

六道はすぐさま、仲間となる人物を探しに席を立った

「しかし…」

ここは裏の賭場。

わざわざ目立とつとにするやつなどいるわけもなく、時間だけが過ぎる。

「お客様」

振り返ると、そこには先程のバーテンがいた

「82度の焼酎と6度のマティーニと常温のワイン、ファンタグレ
ープにバーボンとウイスキーにスコッチを2：3：5：2：4：1：

2・3でちゃんぽんにしたカクテルでございます」

「お…来たか」

六道は、いかにも経験豊富そうな中年ディーラーを連れていた

「てっきり逃げ出したかと…なんだそいつは」

六道の中指は、ライオンのような頭を指差していた

第1話：神速の賭博師（後書き）

どうでしたか？

書いてる内になんかよつわからなく…

容赦ない意見を、待っております！

どなたもぜひ、ご感想、ごクレームを！

第2話・いきなりの窮地（前書き）

出ました

第2話です。

どうにかマンネリにならないよう、頑張ったつもりです。

どうぞお楽しみ下さい！

第2話：いきなりの窮地

「俺が：お客様と組んで麻雀、ですか？」

青年バーテンは少し戸惑った様子でそう言った

「大丈夫だ、ルールとかはちゃんと教える。それに」

こいつは記憶力が格段にいい

それは、複雑なオーダーをすぐに覚えてしまったことから明白だ

麻雀のルールなど、たやすく覚えてしまうだろう

「お客様、俺なんかよりも強い人、ここには沢山いるんじゃないですか？カジノなんですし」

確かにそうだ

ここに集まっている客の中には、麻雀好きも沢山いるだろう

「ここは裏カジノだぞ？前に出てわざわざ目立とうなんて奴、いないだろ」

「それは俺も一緒だし…：なんでお客さんはわざわざ目立とうとしてるワケさ？」

バーテンの言葉に純白は答えず、ステージの上にぶら下げられた檻を見据えた

15、6歳の少女が必死で檻を揺すり、それを見て何人かの客は笑っていた

「なるほど、ねえ」

バーテンはカウンターを身軽に飛び越すと、純白に手を差し出す

「いいぜ。アンタとあの娘、助けてやるよ」

「まさか、そんな若造を連れて来るなんて…おでをナメてると思えんなあ！」

六道が鼻声でヒヤヒヤヒヤと笑うのを無視し、純白は席に着いた

「準備はいいか?…えーと…」

そういえば、バーテンに名前を聞くのを忘れていた

「カズヤだよ。純白さん」

バーテン、カズヤも純白の隣に座った

「さあさあ皆様ー!!」

またマイクが派手にハウリングして、大音量の声を吐き出す

「役者は整いました!どちらのチームが勝つか、存分にお賭け下さい!」

ドワンとドラが鳴り、麻雀の牌が運ばれてくる

しかし…

「なんか…牌が少くないか?」

最初に気づいたのは純白だ

確かに、麻雀をやるにはあまりに牌の数が少ない

「言ったでしょう!?!普通じゃあつまらないと!」

マイクを持った司会者の声が熱を帯びる

「今日、この4人にももらう競技は…名付けて“麻雀ババ抜き”です!!!」

「は？」

純白、カズヤ、六道は思わず声を漏らす

ただ一人、六道の連れて来た中年ディーラーだけは、落ち着いて周りを観察していた

「な、何だよそれ!？」

六道が身を乗り出す

「皆さん、お困りのようで。それでは、ルールを説明致します!!!」

・使うのは、マンス、ピンス、ソーズのどれか一種類と、東南西北と白撥中、計64牌

・子13枚、親14枚を通常の麻雀と同じように取り、親がそのうち3枚を見えないように前に出す

・次の順番の子がその3枚の中から1枚ツモり、同様に続ける

・リーチした場合、前に出す牌は1枚になる

・点数は二人共通で50000点

「なるほどな…」

純白は少し安心した

麻雀素人のカズヤが、変則麻雀などをすれば混乱は避けられない

こういった単純なルールであるほど、カズヤには有利なのだ

「それと、もう一つルールがございます」

司会者もつたいぶる

「普段ならチャンスのはずのドラは、今回は“ババ”扱いです！」

つまり、こういうことだ

・ドラ牌が手牌に入っていると、アガることが出来ない

・相手に引かせる牌の中に、一度に入れていいドラ牌は1牌のみ

・アガりは全てロンアガリ扱い

・カンは有り、ポン、チーは認めない

「……………」

各々が思考に入り、沈黙が広がる

「それでは…スタートです!!」

もう一度ドラが鳴り、雀卓に牌が投げ出される

(とりあえず一局やって、どんなものか試さないとな)

純白がカズヤを見ると、早く牌に触りたくて仕方ないといった様子だ

今はコイツに感じた“何か”を信じるしかない

東一局、ドラはマンズの1、親は六道

純白の配牌は、

マンズの1、1、3、5、6、6、7、8、東、西、西、北、白

さ、最悪の配牌…

顔が見る見る青ざめていくのがわかる

「よし、畑中、引けや」

畑中、と呼ばれた六道のパートナーが牌を引き、

「どつぞ」

とカズヤに牌を向ける

カズヤは牌を取り、

手牌をジャラジャラと忙しなく入れ替えたあと

「ほい」

と3枚、牌を出す

純白がカズヤから引いたのは

マンズの、1…

「んなっ!？」

ヒヤヒヤヒヤ、と、六道が笑う

「なるほど…おめえら、全然提携がとれてねえと見たぞ」

その言葉で、純白は重大な事に気づいた

「おめえはその席に座った時点でカヤの外なのさ」

そう

このゲームは、アガりがロンアガリ扱い

味方から引いた牌でアガっても点数にはならないため

相手から点数を取れるのは、相手から牌を引くことができる六道が
カズヤだけ

「つまり、おめえはサポートに徹するしかねえ」

そう言っつて、六道は純白から牌をツモリ、

「ロン。サンマンコー、ドラマ?...満貫だ」

第2話・いきなりの窮地（後書き）

はい

ピンチです

何か感想や、『ここ、矛盾してる！』

とがありましたら

気軽にお寄せ下さい

では、また次回。

第3話・策略（前書き）

どうも。

この前、話に出てくる『麻雀ババ又キ』、やってみました
結構、狙う牌がみんなとかぶって、なかなかアガれない。

みんなもやってみてね！

…小説も見てね！

第3話：策略

「ま…満貫…」

純白が顔を青くしているのを見て、六道はほくそ笑む

(クソ！！くそ、クソ、クソ！！！)

純白は焦る

今日賭けているのは、金ではなく、“命”なのだ

「いいか、カズヤ。俺にドラはまわすな」

「でも、純白さん」

次はアがる…何としても！！！！

「では六道様、勝利なさったので、この勝負を何回で終わらせるか、決めて下さい！」

司会者が六道にマイクを向けた

な……

マズイ!!!!

「…そうだな、東風やれば十分だ」

る…

六道…!!!!!!

憤りと寒気が、一辺に身体を駆け抜ける

あと

あと3局で妹は…

「おい!!! さっさと始めるぞ!!!」

ドオンと卓を叩く純白

「はい…それでは、東二局、始め!!!」

司会者はたいして焦ったふうもなく、円滑に進行させた

クソツタレめ

ドラは北

純白の配牌は、

マンズの 1・1・2・3・3・5・7・8・9・9・西・西・北

ドラが一枚あるが、まずまずの配牌

待ちによっては四翻役

チューレンポーターだって有り得る手牌だ

いける…!!

「よし、引けや」

六道が畑中に引かせ、

「どうぞ」

畑中はカズヤに引かせる

カズヤから引いた牌は

マンズの2!!!

いける!

六道が純白から引いたのはドラの北

よし!!!

あとは7、8、9のイーペイコーを…

「ロン」

なッ!!!

鳴いたのは…カズヤだった

「ちーといつ…だっけ?二点だ!」

かっ…

「タイム!!」

「カズヤ…」

純白とカズヤは休憩室にいた

「オレらの目的はアガることじゃなくて…勝つことなんだ」

純白がカズヤを設定する

コイツはやはり初心者、何も分かっていない

「いまだって、俺にいい手牌が…」

「分かってないのはアンタだろ」

俺の説教を、カズヤが遮る

「え…?」

「アンタ、熱くなりすぎだよ。自分がアガろうとして、焦ってる。確かに妹さんは助けなきゃならないけど、頭冷やそうよ」

…コイツ…!

「それに、アンタの手役、もうタネ切れだったよ」

は?

熱くなった頭が一気にクールダウンする

カズヤは、東二局終了時の俺の手役を見ていない
ハズだ

「とにかく、純白さんは俺の捨て牌の、真ん中だけを引いて」

「つまり、俺にクズ牌を抱えてるってか…」

そうだ

これがこのゲームの本質であり

実際、向こうもそうしているのだ

カズヤと純白が隣に座った時点で、それは決定したこと

「…解った。俺の妹、お前に預ける」

タバコに火を付けつつ、そう言った

「そこなくっちゃ」

カズヤは半ば嬉しそうにこちらを向いた

「そういえば…アンタの妹さん、何であんなことになってんだ？」

なるほど、確かに当然の疑問である

「まさか、博打でとられた…ってワケじゃないだろ？」

「逆だ。妹を博打で勝ちとろうとしてるんだ」

「お、もう役割分担は済んだのか？」

戻って来た二人に、六道が皮肉を吐く

「東三局…始めよう」

その声には、負けているという弱さは微塵も無く

決意じみたものが伺えた

「それでは、再開です」

ジャラジャラと牌を掻き回しながら、純白は作戦を思いかえしていた

(この局は、流す…！)

それがカズヤの言う作戦だった

その上、全員テンパイが望ましい、という

(本当に、これで勝てるのか…？)

現実的な策とは、けして言えない

どころか、何を考えているのかさえ分からない

しかし、

役を作るのは、あくまでカズヤ…！

「さあ、おでが引く番だぞ」

その言葉で、意識が現実に戻される

カズヤ曰く、

「俺から引いた牌を六道に引かせれば、振り込むことはまず無い」
らしい

カズヤから引いた、マンズの2に、ドラを含ませ、六道に引かせる
3枚に入れる

不思議なことに、振り込まない

そして、

東三局、全員テンパイのまま流局！！

第3話・策略（後書き）

さあ

カズヤの言う、策略とは？

純白の妹は？

来週も、絶対見てくれよな！（次回予告風）

第4話：予言（前書き）

こんばんは。

久しぶりの投稿です

いや、話を考えるって難しいです

読者の方が離れてかないように頑張って書きますので

何卒、よろしくね

第4話：予言

いよいよ次で最終戦

これで、俺の妹がどうなるか決まる

それを、今日知り合った少年に托そうというのだ

「純白さん…行きますよ」

カズヤが俺にそう言って、卓に目を注いだ

「さあ、最終戦だ…おめえらは少なくとも、3翻役以上を作らなきゃならねえぞ」

六道が威勢良く笑う

確かに、六道はこのまま逃げ切るだけ

しかし、この麻雀ババ抜きで3翻など軽いのも事実

「さて、そろそろやるつか」

東四局

定石に乗っ取った、最初の麻雀ババ抜き

純白の役目は、「カズヤの要らない牌を抱え、六道にドラを引かせる」事

つまり純白は

物置と、同じ

それが何より悔しく、

カズヤに全てを託してしまった自分が情けなかった

つまるところ、このゲームは

騙し合いも、相手の手牌の読みも必要ない

単純な、引きの運の勝負と言える。

こんな勝負に、カズヤはどんな策があるのだろうか？

純白の手牌は

「リーチ」

六道が千点棒を投げる

早い…

カズヤは、大丈夫なのか？

不思議と、純白は落ち着いていた

カズヤを信用しているからか、

もう、絶望さえも麻痺しているのか、

俺は直接打っていないからか。

今

六道に振り込んだ時点で、純白達の負けが決まる

牌を読もうにも、河が無い

こういう事態になった時は、カズヤから引いた牌を引かせることに決まっていた

「ちっ…ハズレか」

六道が引いたのは、ドラだ

もう、純白の手牌にはドラが無い

一番のアンパイが尽きてしまった…

待てよ？

純白がドラを持っていないという事とは、

六道はリーチしているので、ドラがあるというのは考えにくい

カズヤからも3回引いたが、ドラが来たのは1度だけ（純白がカズヤから引く牌は、引くためにある3つの牌の真ん中だけと決まっていた）

あの、畑中とかいう奴が3枚持っている…？

つまり、カズヤは敵から一度もドラを引いていない…！！

「うん…間違いない」

突然、カズヤが口を開いた

「六道さん。アンタの待ち、マンズの5、でしょ？」

何だ？

これが、カズヤの言う…策なのか…？

「悪いけど、マンズの5は俺が刻子で揃えてるし…もう一つは裏ドラ表示牌だよ」

相手の牌が読めたフリをして、追い込んでいく

…ゆすり

カズヤは、精神的なダメージを狙っているのか？

当たってたら当たってたでダメージだし、

ハズレても、あわよくば相手が油断する

違う。

こんな単純であるはずがない

「ふん…ハツタリだろう？」

六道は大袈裟にリアクションして反論する

「はっは、何を言い出すかと思えば…」

カカカカと笑い、ちらりと 俺の妹を見た

「純白、悔しいだろう？おでと直接闘えずに…妹を取られるんだからな」

「……の……」

純白は拳を固く握りしめ、

「純白さん」

カズヤが割って入る

「カズヤ…お前には話したろう？俺の妹がどんな目に…」

「そっじゃない」

俺の悔しさを遮り、カズヤが言う

「俺らの勝ちが決まったよ。」

「……は？」「……」

カズヤを除く3人が思わず声を上げ、観衆がざわめき始める

「六道、アンタの待ちはマンズの5。即アガリを意識したリーチのみ手」

六道の顔に焦りの色が見えたのを、純白は見逃さなかった

「もつと言おうか？左から2・3・4・6・7・8・8・8・西・西・西・北・北・北」

一言言つごとに、六道はどんどん青ざめる

「そしてこれが…俺のアガリ牌だ」

畑中からわざとらしく、ゆっくりと牌をとるカズヤを、六道は汗まみれで見っていた

「ロン。…スーアンコーだ」

「なっ……………あ……………」

ワアアアアアアア！！

とたんに会場から歓声が沸いた

「お客様！ここは秘密裏に運営されているカジノゆえ、お静まりを
！」

ドン！！

止まない歓声を遮ったのは、六道が卓を叩く音だった

「…もう一度だ」

六道は、司会者をにらみながら言う

「よろしいですが…一応純白様側の勝利ですので、賞品の娘をあらへ渡したあとで、あちら側の同意があれば、という事になりますか…」

六道には聞こえていなかった

さっき負けたのは、おでと畑中が牌をやりとりするための、秘密のサインが読まれたからに違いない…

それが割れた以上、サインを使わなければ問題ない！！

「純白オ！おでと、もう一度勝負だ！！」

それに答えたのはカズヤ

「もう一度？こっちは役満出してるんだ。点棒を引き継いで南風戦つてんなら考えるけど。…あとアンタ、今度はアンタも何か賭けるよな」

「キッ…サマ………」

完全に向こうのペースにされて、六道はますます沸騰する

「おいカズヤ！俺らは勝ったんだぞ？これ以上危ない橋は…」

さすがに止めたほうがいいと言う純白

「いいじゃんいいじゃん、まだあっちも何で負けたのか分かってないみたいだし、それに…」

「まだ俺の儲け分が無いからね」

第4話：予言（後書き）

どうでしたでしょうか？

この話のオチを考えるのにかなり時間がかかりました

これからは2週間に1話書ければいいかなと思ってます

次話、ご期待を。

第5話：理由（前書き）

みんなー

お久しぶりー（裏声）

予言より遅くなりました。
作者、連載向いてなくね

楽しんでくれる人がいれば幸いです

さあ、読みたまーい！

第5話：理由

「さあ、アンタも何か大事なものを賭けるよ」

カズヤにそう言われると、六道は低く唸った

なぜ、こんなことに…

本来なら、おでは圧倒的優位な立場で

人質をとられた弱者を狩るだけだったはずだ

おではいつも狩る側、優位な側で博打を打つ

そんな資格と実力を持った人間なのだ

「おい、小僧。」

汗まみれの顔を上げ、六道はカズヤを睨む

「もしもおでが、一千万賭けたら…おめえは何を賭けるんだ？え？」

精一杯の虚勢。

有りつたけの気迫を乗せて睨みつけても、

小僧は動じない

「…その場合、点差を無くして勝負する」

純白の方をちらっと見てから、淡々とカズヤは言った

「いや、それだけじゃ足りん…麻山純白と打たせる」

六道にとってこれだけは譲れない条件だった

「…俺とカズヤの席を交代しろってことか」

今まで、何とか事なきを得ようとしていた純白が六道の方へ向き直る

「ああ、そうだ。おでは一千万を賭けて戦う。おめえが負けたら、おめえの妹はまた檻のなかだ」

「一千万だと…？そんなんじゃ、人の命をそんなもんで！！」

ニタニタと笑う六道に、カズヤが怒声を飛ばす

「よせ、カズヤ……このクズ共にとって俺の妹は…美咲は………」

カズヤはまだ若い

世の中の秩序が、ルールが、法律が、人間を人間として保持していると信じている

そうではないことなど、純白はとうのむかしに知ってしまっている

妹が、美咲が生まれてから

純白の両親は、最低の人間だった

父親はギャンブラー

母親は麻薬中毒者

二人は借金を重ね、負債が一千万を超えるまでに膨らむと、

金融会社の借金取りに、ある博打を持ち掛けた

「俺の妻は今、妊娠してる。その子が女なら、あんたらにくれてやる。もしも男なら……」

そして、純白が生まれた

彼は無関心な両親に、愛情を注がれずに育った

六歳の頃には父を相手に麻雀を打っていた

だが、ろくに稼がない両親はまた借金を重ね

母がまた子を孕んだ

「……………」

純白はそれっきり、黙り込む

「ククククク……」

静寂を破ったのは六道だった

「純白、おめえは本当にそんな理由で、妹があんな目にあっていると
思ってたのか？」

可笑しくてたまらないといった表情で、六道は下品に笑う

「おかしいと思わねえか？借金のカタに取られた女の行方は、奴隷
か売春婦か、どっちにしろこんなどこにやあ出てこねえ」

「そのくらいにして貰おうか」

突然、六道を黙らせたのは

今まで沈黙を決め込んでいた、畑中だった

「全く……」

畑中が立ち上がると、ステージを張っていた黒服が六道を取り押さえる

「なっ……何しやがる……!」

畑中は答える代わりに、六道の横っ面を踏み付ける

「全く……折角安全な檻の中でぬくぬくと暮らしていたと言つのに……自ら外に出るとは」

態度が豹変した畑中を警戒する二人を尻目に、会場は無責任に盛り上がる

「申し遅れました。私、この六道と同じ、飼い犬の畑中です」

畑中がパチンと指を鳴らすと、六道は奥へと連れて行かれた

「さて、純白様…これから貴方には妹さんを賭けて私と勝負して頂きます」

その言葉で、会場が沸いた

観客にはサクラが何人が混ざっているだろうが、純白は直感した

この勝負、避けられないと

「何で…俺の妹をそんなに欲しがるんだ？ヤクザのプライドか？」

フツ、と畑中はせせら笑う

「成る程、知らなかったのですか……うん。知っていたなら、もっと賢い方法で妹さんを使えたはずですしね。納得です」

畑中はわざとらしく頷き、にやけていた

「どついうコトだ？」

「貴方の妹は、天然の、麻薬、なのです」

な……に……？

「な……何だつて？」

畑中に聞き返したのはカズヤだった

彼は人の良さそうな微笑みを浮かべ、良いでしょうと説明を始める

「純白様、貴方の母親は麻薬中毒者だった。そうですね？」

純白が苦そうに頷くのを確認して、畑中が続ける

「貴方が生まれた時はそれはさほど問題無かった。しかし、貴方の妹が生まれる時は……そう、麻薬が作用してしまった」

畑中は更に続ける

「そういう場合、大体は脳が麻薬で侵されて廃人同様。しかし貴方の妹には……それが無い。率直にいいますと」

「貴方の妹は体内で麻薬を製造している。それも、至って正常な状態です。素晴らしいとは思いませんか？彼女の体液、老廃物全てが甘美なる麻薬であり、検問などの法的麻薬対策にも引っ掛かることは無いのです」

コイツの顔は、本気だ

そして、この話を畑中はとても楽しそうに話している

「てめえ……」

純白とカズヤが同時に吐き捨てる

「どうですか？あなた方が私どもに勝てば、妹さん、美咲さんの病気を治して差し上げますが？」

「……………なんだと？」

第5話：理由（後書き）

感想ください。

てか、

ダメとか指摘してください
手探りでなんか不安なんです

待ってます

第6話・決着（前書き）

どうも

この話も結構時間がかかりました…

更新速度、こんぐらいが私に合っているというわけで

さて

この話で麻雀ババヌキの章はおしまいです

まじげいじゅくくじ〜

第6話：決着

「妹が、美咲が…病気？」

純白は今まで出すまいとしていた弱気な表情を浮かべた

手には汗が滲み、声がかすれる

相手が“賭け”の対象にするということは、それだけ重病なのか

畑中の笑いジワが深くなる

「勿論、病気とは例の麻薬体質のことではない。珍しい病気ですが、治療が難しい訳でもない」

会場は畑中の説明を聞こうと静まりかえり、ピアノ演奏が嫌に耳についた

「ですが、あなたの妹さんが、普通の医療機関を受診出来ると思いますか？…妹さんを救いたいなら、この勝負を受けて貰うしかないと思いますかね」

全て、

想定されていた…

奴らにしたら、俺が勝つことなど何の問題でも無かった

俺の、俺達の人生をぶち壊した金貸し、ヤクザという存在に俺は精一杯、噛み付いていたつもりだったのに

奴らは、負けることなど……無い。

尽くせる手数が違い過ぎる

こんなの、

こんなの、ギャンブルじゃない……

(純白の心は完全に……喰った)

畑中は半ば勝利を確信した

心の弱った人間を討つことなど、赤子の手を捻るほどたやすい……

問題は……

「おい、この勝負は俺も入っていいのか？」

この、カズヤとか言う男

麻雀のルールをすぐに覚えてしまう頭といい

それを変則ルールでの確に使える応用力といい

やったこともない賭博を淡々とこなす行動力、度胸：

敵にまわすと、とても厄介なことになるだろう

「ええ、構いませんよ。こちらが勝手に六道を外してしまったので
すから」

カズヤが参加するということで、純白は少し安心した様子だ

確かに、このカズヤという男は危険だが、

だからこそここで潰すなり、仲間に引き込むなりしなければ

それに、あの六道の手牌を言い当てたトリックは既に分かっているのだ

「では、始めましょうか。六道の代わりは用意しますので」

もはや進行も無くなってしまったステージに、3人は再び戻った

「席順は、それで宜しいのですね？」

畑中がわざとらしく聞いた

この麻雀ババ抜きで、席順ほど重要なものはない

だが

今回も、純白が“物置”の役割をする席順だった

「ああ。情けないが、俺よりコイツ……カズヤの方が勝てそうなん
でね」

不甲斐なさそうに純白が答えた

成る程、純白にしては当然の選択だろう

なんせ、相手の手牌を全て言い当ててしまった味方がいるのだから

しかし

カズヤのその“イカサマ”は、もう読めている…

「今回も東風戦のみ。宜しいですかな？」

サイコロを持ちながら、畑中が確認する

勿論、異論は無かった

「では、始めましょう」

畑中の仲間を加えた四人の顔が一様に強張る

親は純白からだ

(フッフフ……早速、引き離してしまうかもしれん)

畑中は顔に出さずに、半ば勝利を確信した

六道の代わりに連れて来た折原は、この麻雀ババ抜きを熟知しているし、今まで振り込んだことがゼロに等しいのだ

それに、先程カズヤがした“イカサマ”とは

こちらが用意したもののだから

(このゲームで使われている牌には、目印が付いていた)

牌の上と下の継ぎ目に、傷が付いているのだ

傷の数で数字を示し、傷の位置で種類を見分ける

奴は、それに気づいた

それならば、相手から好きな牌を取れるし、ドラを引くこともない

(だが、その手は封じさせて貰った……)

そう、今使われている牌には傷がない！

(おめ、びびりする…?)

(クソ、一体どうなってんだ!?)

純白は早くも焦っていた

カズヤが、トイレに行って戻って来ないのだ

(カズヤの奴、牌をツモってからの様子がおかしい…)

急に汗まみれになって、トイレに行ってしまった

「おや…彼は、一体どうしてしまったのでしょうか」

畑中が意地悪く笑う

「待たせたね」

「カズヤ!どうしたんだ?」

やっと戻ってきたカズヤに、純白が心配そうに聞く

「いや、何でもないよ。何でも……続けよう」

戻ってきたカズヤはやはり、顔色が悪かった

「さあ、早くしないと夜が明けてしまいますよ」

ニタニタしていた畑中が牌をツモると、一層破顔して笑った

「ロン。タンピンです」

(やはり…おかしい)

もはや純白の顔も汗まみれだった

続いて東二局も、リータンピンの三翻でアガられてしまった

畑中など、六道顔負けのしたり顔をしていた

「どうしたんだ…？カズヤ…」

純白は不思議がった

カズヤの今までの勢いが嘘のように消え、畑中は逆に調子づいている

「なあカズヤ…アイツの…畑中のアガリ、妙に早くないか？」

続けざまに、カズヤに疑問をぶつける

なんせ、今まで畑中は常に5順以内にアガっている

「……してるだろうね、イカサマ」

普通の声色で、カズヤがこんなことを言った

「なっ…そんなことってあるか！！大体、何で教え無かったんだ！」
取り乱し気味の純白をカズヤがたしなめる

「あのね、イカサマやってるのが決定的でも、肝心のタネが暴けな
きゃ…」

「その通りです」

どうやら畑中に聞こえていたらしく、畑中が口を挟む

「イカサマなんてテクニクと同じ。見つかったときのリスクを考
えれば当然の見返りではないですか」

「いいのか？てめえがサマってるって言ってるようなもんじゃねえ
か」

堂々と自己正当化する畑中を純白が脅す

「フッフ…イジメと同じですよ。やられる間抜けさんが悪いんです
……第一証拠がない」

純白はそれ以上何も言えなくなった

「純白さん」

カズヤが口を開いた

「次の局、全員テンパイで流局に出来れば……勝てます」

「ほう、まだそんなことを言っていたとは！」

反応したのは畑中だ

「本当に、全員テンパイで流局に出来れば勝てるんですね？」

畑中がニヤニヤしながら聞くと、カズヤが頷いた

「フフフ……これは面白い。折原、この局、なるべく要望に応えようじゃないか」

「純白さんは、それでいいか？」

純白はゆっくり頷いた

東三局が終わり、全員が手配をさらした

「全員テンパイのようですね」

畑中の手配は、スーアンコー待ちのテンパイだった

「さて、これで私に勝てると、そうおっしゃるのですね？」

畑中と一緒に、カズヤも笑う

「ああ。あなたがたとエイカサマをしてもな」

「ククク…フフフ…宜しい。では早速、最後の局と行きましょう」

畑中はもう勝った気でいた

私のイカサマに、奴らが気づいた形跡はない

前の局で純白が必死に私の手やら目線を探っていたが

甘い………！

私のイカサマのタネは

ピアノ演奏の…和音…！！

会場のピアノ演奏者を相手の手配が見える位置に配置し

オクターブと和音で「聞き分けて」いたのだ

これなら証拠も残らず、音楽の知識でもなければバレることもない

「立直…!!」

あっというまに畑中がテンパる

ただのリーチ手だが、2、5の両面待ち

(これで私の組織での名も上がる…)

「さあ、そろそろ妹様を引き渡す準備をしたほうが宜しいのでは？」

「その必要はないよ」

答えたのはカズヤだった

「ほう。絶対勝てると言っておきながら、リーチすら出来ていない
あなたが、何を…」

畑中はカズヤを嘲笑っていた

次に純白から引く牌の中に、マンズの2があるのが…聞こえる…

「知りたかったものです。あなたの必勝法を…」

「じゃあ、教えてやるよ」

残念がる畑中に、カズヤはそういった

「西・西・西・1・1・1・3・4・東・東・7・8・9」

「なっ………!？」

畑中が驚嘆の声を漏らす

自分の手配を、左から順に読み上げられた…

まさか、ピアノのイカサマがバレたのか…？

いや、ピアノ演奏者からは私の手配は見えないはずだ

「当たってるみたいだね。そんでこれで」

「ロン。大三元だ」

「かつ……………！！！！！！？」

畑中が床にひっくり返り、青ざめる

純白はカズヤの能力を薄々感じていた

瞬間記憶能力 ……！！

見たもの、聞いたことやイメージを一瞬で記憶し、それを鮮明に脳内で再生出来る能力

最初に純白の無茶なオーダーを覚えてしまったのも、それで説明がつく

全員テンパイで流局というのは、王牌以外の牌を全て記憶出来るから

「そう。俺は瞬間記憶能力者」

カズヤがそう言うと、畑中がおもちゃのように跳ね起きる

「い、イカサマだ…牌を…記憶していたなんて」

「おいおい、俺はイカサマしたんじゃないぜ。バレー選手に3メートルのやつがいても、誰も文句言えないだろ」

畑中はまた倒れ込む

「カズヤ、ありがとう。お前の勝ちだ」

ビー！ビー！ビー！

突然会場に警報が鳴り響き、客が逃げ出した

「まさか…」

「警察の、ガサ入れ…！」

妹のところに駆け寄ろうとした純白を、カズヤが制した

「やめろ！妹さんを警察に調べられたらやばい！」

「どろろっていうんだ…！」

少し考えて、カズヤが言った

「妹さんを、奴らに渡すんだ」

純白の顔が蒼白になる

「奴らは妹さんを欲しがってたんだ。脱出ルートぐらいあるだろうし、みすみす捕まらせたりしないハズだ」

「お前：あんな奴らに美咲を渡したら…!!」

純白が取り乱し気味に否定する

「俺がなんとかしよう」

二人が振り向くと、六道がいた

「この娘を連れて帰ればおでの株が上がって、この娘を安全に出来るかもしれない。なによりヤクザってーのは、ケジメをつけたがるもんだ」

「六道…なんで……」

「おでは、本気でおめえと決着をつけにきたんだ。あんな夕コ野郎の邪魔が入ったババ抜きなんかで、納得でまん」

複数の足音が、すぐそこまで来ていた

「純白さん！早く！！！」

「……………チクシヨオ！！！！！！」

「あーあ、純白さん今頃何してんだろ……」

あれからなんとか逃げおおせ、純白からの連絡がこないまま一週間が過ぎようとしていた

報酬の500万だけは振り込まれていたが

「妹さんの消息が掴めたら、俺も手を貸すのに」

「カズヤくん、先生が呼んでるよー！」

「…うん、」

第6話・決着（後書き）

さあ

次回からは学校編でございませう

あいつ学生だったんだ…

まだ続くよ

第7話：超能力（前書き）

はいどうもー

私にしてはお早い投稿で

やらして貰ってますー

そいじゃ、ごめっくりー

第7話：超能力

生徒達が起こす喧騒

電車が通り過ぎたり、車のクラクション等の生活音

先日とは匂いの違う「ざわめき」の中に、カズヤは居た

「カズヤくん、おはよう！」

「よっ、カズヤ！」

その中でカズヤは、ごく自然に存在していた

カズヤの「高校生」という身分からすれば、それは当たり前のこと

だが

カズヤはそんな自分に、「違和感」を感じていた

「みんな座れー！授業を始めるぞ！」

カズヤのいる教室に教師が入って来る

至極自然な、何事もない日常だが

カズヤはもう、自分がここの住人ではないと理解している

一週間前、彼が初めての賭博を経験してから…

そこは、法から外れた世界

人が自らの欲望をさらけ出し、他人を蹴落とす

道徳など微塵も感じさせず、常に漂う死臭を甘言と雰囲気で掻き消し

人を糧とする人間がはびこる

ここにいる奴らは、それを知らないのだ

溶け込めるはずがない…

学生がどれだけ悪を語るうが、正義を振りかざそうが

ぬるい……

カズヤは、あの煮えたぎるような熱湯の中に

本物の賭場に戻りたかった

理由は一つ

「金」、ただだ

昼休みに入り、カズヤは数人の生徒、いわゆる「お友達」と机を並べていた

「さあ、飯だ飯だ」

人一倍陽気な奴が、会話の皮切りにそんなことを言う

こいつらの名前は覚えていない

もつとも、記憶はしているが…

カズヤの意識は、このところ常に携帯に注がれていた

唯一のギャンブルのコネである、純白の連絡が一向に来ない…

カズヤは、協力するなら純白と決めていた

カズヤも同様に、ヤクザを憎んでいたから

「カズヤ、聞いてる？」

ふと我にかえると、どうやら隣の女子が自分に話し掛けてきていたらしい

「悪い悪い。エビフライはソースかタルタルかで頭が一杯だった」

「あはは、ケイコの話はエビフライ以下かよ！」

皆が笑うのに合わせてカズヤも笑う

「もう、ちゃんと聞いて。3年の悪い奴らが、トランプで後輩からお金を巻き上げてるらしいわ」

カズヤの箸の動きが止まる

「ケイコ…その話、詳しく……」

「間山くん、いますかー」

その時、教室のドアを乱暴に開け、3年生が2人ほど入って来た

「は……はい」

今まで1人で昼食を食べていた「間山」が、情けない声を出して連れて行かれた

「可愛そうに…今日のカモは奴らしいな」

こいつらは、まともなほうだ

行動するより心で哀れんでいるほうが、案外正義感が強い

「俺、ちょっとジュース買ってくるわ」

そう言って、カズヤは弁当に蓋をする

学校の地下、ボイラー室の隣に、使われなくなった机や椅子をしま
つておく教室がある

そこは普通の教室とは違いドアに窓がついていなく、人も滅多にこ
ない

イジメと不良をやるには最適な場所だった

「そう緊張すんなって。俺達はただ、遊び相手が欲しかったんだ」

間山を誘った不良、木村と小川が言った

使えそうな机と椅子を教室の真ん中に4つ向かい合わせで置き、そ
の横にはホワイトボードがある

「でも、ただ遊ぶんじゃないよな…そう、つままないだろ？」

木村がクスクス笑いながら言う

「これからやるゲームはポイント制なんだ。…そこで、1ポイント
につき千円、賭けようか」

「えっ…っ、困りますっ！」

間山が哀願する

「持って無いとは言わせないよお。早朝のバイトで、給料貰ったばっかりなんだろう？」

「ゲームはこれ…トランプだ。公平だろう？」

2人は間髪入れずに喋り、間山に反論の余地を与えない

「買ったばかりの奴だから、イカサマもなにもできないし、ひよつとしたらそつちが儲けるかもしれないし」

2人は強引に、間山を「ゲーム」に引き込んだ

「今日は、『超能力』っていうゲームをやるよお」

・超能力：ルール

・ジョーカーを一枚抜いた53枚のトランプを使う

・全てを山札とし、1人一枚ずつトランプを引く

・引く前に「マーク」「数字」「マークと数字」のどれかを宣言す

る。マークが当たったなら1ポイント、数字が当たったなら5ポイント、マークと数字を当てたら15ポイントが加点される

・引いたカードは捨て札として、伏せて重ねる

・ジョーカーを当てると手持ちのポイントが5倍になる

「とまあ、こんなふうに、完全に運だけのゲームだ」

小川がトランプを取り出し、ジョーカーを一枚抜いてシャッフルする

「順番は俺、木村、間山くんがいいかい」

そして強引にゲームが始まった

「じゃあ俺からだな…ハート」

一番手の小川がマークだけを宣言し、山札からトランプをめくる

「なんだよ、ハナっからジョーカーかよ」

小川がめくったカードはジョーカー

逆転の鍵を握るカードが、一番最初に出てしまった

「なんだよ、つまんねえなあ」

木村と小川はこう言いつつも、内心ホツとしていた

ジョーカーが終盤まで残ってしまえば、皆が皆ジョーカーの連呼
ゲームもつまらなくなるし、なにより完全な「運任せ」になってし
まう

そう

このゲームは、けして運だけのゲームなどではない

イカサマによって、ほぼ自分達が勝てるように仕組まれている…

買ったばかりのトランプは、殆どの場合規則的に並んでいる

このトランプは上から

スペードの1〜13

クローバーの1〜13

ハートの1〜13

ダイヤの1〜13

ジョーカー2枚

となっている

それを半分にわけ、ショットガン・シャッフル（半分に分けたカードを1枚ずつ重ねるシャッフル）を

半分ずつ、黒は黒、赤は赤で普通のシャッフル（ヒンズーシャッフル）をしてから2つの山をショットガン・シャッフルすると

山札はほぼ、黒・赤・黒・赤…の順になる

相手は「何が何枚出た」ということの記憶に夢中で、案外この法則性に気がつかない

せこいが、確実に点が取れる方法だ

「えーと……1ゲーム終わって俺が12ポイント、木村が6ポイント、間山くんが2ポイントか」

まんまと間山は、2ポイントしか稼ぐことができなかった

このゲームをやったことがなく、木村達の真似をしてマークのみの宣言を積み重ねた結果だった

「さあ、じゃあ木村が俺に6千円、間山くんが1万円の支払いね」
もちろん、木村の6千円は後で回収する

間山は蒼い顔でただ座っていた

「ほんじゃ、まだ時間があるからもう1ゲーム…」

「待て。」

突然ドアを開け、1人の男　カズヤが入って来る

「なんだ？お前……今俺達は　」

敵意剥き出しの2人を、カズヤが柔らかくたしなめる

「知ってますよ。ただ俺も博打好きで、まぜて貰おうと思って……」

2人はそれを聞いて、態度を変えた

「なーんだ、そうなのか。いいよ、大歓迎だ！」

「博打好き」とか、そういう奴ほどイカサマに弱い。それに、自分からやりたいと言っているのだ。チクられることもない……

いいカモだ…

「じゃあ、ルールを…」

トランプを回収しようとした小川を、カズヤが止めた

「ストップ。次のゲームは、この捨て札の山を……このまま使い
ましょう。シャッフルしないで下さい……」

第7話：超能力（後書き）

さて

いやー、駄文だ駄文だ

超能力、知ってる方もいらっしゃるのではないのでしょうか

さ、学校いじ。

第8話：消去法（前書き）

1ヶ月ぶりにコンニチハ

書くの遅いですよ〜

まあ、コツコツ書いて出来たら投稿というスタイルで行きますんで

どうぞ宜しくお願い〜

第8話・消去法

「捨て札をそのまま山札にして…やる？」

木村、小川、間山が一斉に言う

「つまり…さっきのゲームの並び順と、丸きり逆になるって…何か」

木村が捨て札に伸ばした手を引っ込める

「それだけじゃない。もうひとつ、ルール変更がしたい…マークと数字の両方を当てたら、順番を逆回しにする」

木村と小川は顔を見合わせた

(…どういうことだ?)

(さあ…ある程度カードがなにか分かっているから、順番を掻き回したいんじゃないのか)

(あとひとつ、ひっかかるコトがある)

「おい」

質問したのは木村だ

「カズヤだっけ？お前はどうか知らないが、俺達3人は山札の一番上のカード、つまりさっきのゲームの最後のカードは覚えてる。そこんところはどこうする？」

当然の疑問だ

一番上のカードは把握出来ているから、順番が最初になった奴が確実に15ポイントとれる

「そうだな…さっき言った追加ルールを採用してくれんなら、あんたらからでいいよ」

顔色ひとつ変えずにカズヤは言った

小川が、その言葉にひっかかるものを感じた

「あんたらって……どういう意味だ？」

「言わなくても分かるでしょう？あんたらが間山を食い物にしてるなんて、誰が見ても明らかだ」

途端に、カズヤの目には敵意の色が宿る

「俺は間山と組む。ポイントは味方との合計…それでいいですね？」

今まで下を向いていた間山の顔に生気が戻る

「そんな、いいんですか？カズヤさん…僕なんかと組んで……」

カズヤは何も言わずに口の端を持ち上げた

(クソッ、調子狂うな……)

木村と小川は、言いよりの無い不安に襲われていた

何を考えているか分からない奴に、主導権を持っていかれている

だが、2対2という形になったのは好都合だった

山札の並びを二人とも知っているので、その気になれば様々なことが出来る

山札がそのままひっくり返ったというのも大きい

どんなにバカスカとカードを当てても、「一回見ている」というア
リバイが成立している

そう。負けるハズが無い…

「おっと、言い忘れてた」

いかにもうっかりと、カズヤが手を叩く

その音に木村と小川がビクついたのを、間山は見逃さなかった

カズヤが味方についたことで、不思議と安心感があった

「このゲーム、レートは1ポイント一万円にする」

間山の安心感が一挙に崩れる

「なっ…何ですか！」

この「何で」には色々な意味があったが、間山はそれをいっぺんに聞いた

「何でってお前、一回山札を見てんだったら当然競るだろ」

カズヤはさも当たり前と言った

驚いていたのは木村側も同じだった

何しろ、奴　カズヤは山札を見ていないのだから

(何だよ、あの自信…)

しかし、これはチャンスなのだ

逃げられるまえに始めてしまおう…

「俺からだな…ダイヤのクイーン」

ハズレているはずのないカード

ここにいる三人は知っている、一番上のカードは予言どおりに顔を出す

「これで15ポイント先取だぜ」

木村がホワイトボードに点数を書き込む

これだけで勝ち点が、15万

二人が互いを見る

互いを安心させるように

「逆回しだから俺だな」

そうだ、忘れていた…

数字とマークを当てたら逆回転

恐らく、記憶に新しい最初の二枚を同じチームで取らせないためだ
ろう

だが

次はカズヤだった

「ハートの2」

カズヤは何のためらいもなくカードをめくる

「なっ………！」

声を上げたのは間山だ

「ちえっ、クラブの3か、惜しい」

三人は呆然としていた

コイツ…何だ!?

何らかの策があつて参加したんじゃないのか？

「カ、カズヤさん……」

「ドンマイ、次があるさ」

再び蒼白になつた間山の肩をバシバシとたたかくカズヤ

「どうした？間山くん……早くやりなよ」

木村側の二人はニヤケが止まらなくなっていた

（次は、確かダイヤの……7だっけ……9だっけ……）

間山は思案した

マークと数字を宣言すれば、どちらかを間違えたら例えどちらかが合つていてもポイントは無し

間違っていたら0ポイント……

その葛藤が、間山を弱くした

「……ダイヤ」

めくったカードはダイヤの7だった

「あれ？間山くん、そんな慎重でいいのかい？ 8だ」

小川がめくったカードはスペードの8

「これで20ポイント…」

木村が考えるふりをして、それを見て小川が笑っていた

「確か…ダイヤのエースだったかな？」

軽い動作でカードを跳ね上げる

ダイヤのエースだった

それから何順かして、残りカードは28枚

点数は、木村側が39ポイント、カズヤ側が7ポイントだった

木村側はマークだけでコツコツと稼ぎ、カズヤ側は間山が数字を一度当てて、あとはマークを二回

圧倒的に負けてはいるが、間山の顔色は幾らかマシになっていた

「カズヤさん…この山札、赤と黒の順番で交互になってませんか？あの二人も、赤と黒の順番でしか言って無いんです」

とうとうバレたか……

追求されてゲームを白紙にされることを恐れていたが、カズヤは意外な返事をした

「うん、知ってるよ。早くやれ」

一同のあいだに沈黙が居座ったあと、間山がヒステリックに叫ぶ

「しっ…知ってた!?!…じゃあ…何で…」

そう

カズヤはゲーム当初からマークと数字の両方、つまり15ポイント狙いしかしていない

確かに、勝つにはそれしかない

だが、この男には少しでも損失を減らすということが考えられないのか

「…分かったよ。少なくとも、数字だけにする」

カズヤはやれやれと両手をヒラヒラとゆする

マークの法則性がバレたのは、木村側にとって誤算だった

だが

それに気を取られて、奴らはもっと「大きい」損を見逃すだろう…

それに奴らが気づか無ければ

ククク……………

残りカードは4枚

カズヤ側はカズヤが数字を当て、間山がマークでコツコツと稼ぎ1
5ポイント

木村側はあまり成績を伸ばせずに

50ポイント…

「大分カードが少ないな…クローバー」

小川がめくったカードはハートのジャック

「ちえつ、次だ」

順番が間山にまわる

間山は簡単には動かない

いや、動けない…

何しろ相手チームとのポイント差が35…

マークと数字、当てるしかない！

法則性に従うと、次のカードは黒

何となく…

何となく、「5」が出ていないような気がする…

「3」も出ていないような気がする…

どうする!?

そうになると疑心暗鬼

どちらとも取れない、不条理な二択に思えてきて、訳もなくイライラする

「スピードの……5」

「ハズレー！」

木村と小川が同時に言う

スペードの、3…だった……

残りカードはあと、2…

「あっ……」

間山は、「気づいた」。

そう……

「そう。最後のカードは……ジョーカーだ」

木村が声を大にする

「そうさ。仮にカズヤが15ポイント取れたとしても、俺の番で持ち点が……5倍。つまり」

250ポイント……！！

「つまりどう足掻こうと、お前らの支払いは……200ポイント以上！！」

二人の高笑いと共に、椅子に間山がへばり付く

「お前ら、何か勘違いしてないか」

カズヤがゆっくりと山札に手を伸ばし

キツパリと言い放つ

「クローバーの3」

めくったカードは、宣言通りのカードだった

「とらじろアアは」

「逆回転……!!!!」

「「「あっ」「」」

一つの歓喜と、二つの悲鳴が響く

「あーあ、お前が」最後のカードがジョーカー…なんて言わなきゃ、俺は二択だったのに」

絶対的な記憶力を持つカズヤにとって、最後付近のカードを当てる

など朝飯前

「これで俺達の持ち点は5倍で、150ポイント…俺達の、勝ちだ」

第8話・消去法（後書き）

さあ、超能力編がおわりまして

次、どうしよう…

な私ですが

黒の組織みたいなので出そうかなあ…

それではまた次回

第9話：参加（前書き）

毎回、投稿間隔は広がっております

内容が少し長いので許してね

どうぞごめい

第9話：参加

「俺達の持ち点は150ポイント。差額分の100ポイント…つまり100万円勝ちだ」

嫌に低く、そしてはつきりとした声でカズヤが勝利を、呆気なく終わったゲームの終わりを宣言した

「……そんな大金、払える…ワケが無い…！」

口を開けて宙に目を泳がせていた木村が、途絶え途絶えに声を絞り出す

同意するように、小川も焦点の合っていない目を無理矢理カズヤに合わせた

間山はどうしていいか分からない様子で、またカズヤを見ていた

「お前ら、額が現実的じゃないからって、お流れになるとでも思ってたのか？」

カズヤは席を離れ、二人を見下す

小川は哀れな声で抗議した

「俺達は勝ったとしても…弱みにしてパシろうと思ってた…！だか

ら…！」

カズヤがポケットから通帳を取り出し、二人に突き付けた

その額は、まるで宝くじにでも当たったかというくらいのもだった

「俺は例えお前らが全部15ポイントを取って、尚且つ5倍になっても払えた。そうじゃないと成立しないだろ？大体…」

「カズヤさん…！」

間山が泣きそうな声でカズヤを止める

カズヤだって、こんな奴らから大金を勝とうなんて考えていなかった
だから、軽い説教と脅しで済ませるつもりだったが…

「一部始終、見させて貰ったよ」

いつの間にか空いていた扉の向こうに、男が立っていた

黒い、手入れの行き届いた長髪に整った眉

いかにもお坊ちゃんといった様子の生徒が、ゆっくりと室内に入ってきて来る

木村と小川が急に立ち上がる

「篠宮さん…どうしてここへ!!」

二人はゲームに負けたときよりもずっと蒼白だった

「木村、小川。僕は君達に、”博打の強い奴を捜せ”とは言った」

篠宮と呼ばれた男が、二人の目前まで歩み寄る

「だが、つまらないしなぎで小金を稼ぐほど、僕が払う給料に満足していなかったなんて、知らなかったよ」

たたえていた笑みが崩壊し、プレッシャーが滲み出る

カズヤはそれが殺気だと知っていた

二人は気が付くと、床に額を擦りつけていた

篠宮はそのままにしながら、カズヤの方を向き直る

顔には笑みが戻っていた

「失礼したね。カズヤくん？君は博打が強いようだね」

篠宮は財布とともに小切手帳を取り出し、その上に万年筆を走らせる

「勝ち分は僕が払おう」

「どうも。でも出来れば半分はそのの、間山に渡してくれないか？」

カズヤは至って冷静に、慣れた対処をした

「これはまた失礼したようだ。ところでカズヤ君、君に話があるんだ」

篠宮はカズヤを連れて、また土下座したままの木村と小川を無視して、教室の扉を開けた

「カツ、カズヤさん！」

「お礼ならいらんぞ」

ドライに返すカズヤを、間山は尚も引き止める

「いえ…カズヤさん、その人についていっただら…」

やはり、間山は一般人

良心という重りを腕に巻き付けたままの……

「間山、お前さ…俺のことイイ人とか思ってるない？」

凶星だったようで、間山は唇を噛む

「俺はだいぶまえから…こっち側」だよ

「カズヤ君、彼とはあれでよかったのかい？」

学校の外に停めてあつた車に乗り込みながら、篠宮が聞いた

ゲームに熱中し過ぎて昼休みなどとつくに通り越し、今はもう放課後

「よかったかって…淡水魚は海水じゃあ生きられない」

「そしてどっぷり」海水魚”の君は淡水じゃあ息苦しい、かい？」

ハハハと笑いながら、運転手に発車を促す

「まあな。でも、こんなトコでチャンスに出会うなんて思わなかった」

何かの瓶のコルクに奮闘しながら、篠宮が意外そうな声を漏らした

「気づいてたのかい？ これからどこに行くのか……」

「大体予想はついてる」

ようやく空いた瓶の中身を受け取りながら、カズヤは答えた

「それは頼もしい」

急に車の窓にブラインドがかかり、外が見えなくなった

「でも、君が想像しているよりずっと酷いかもしれないな」

篠宮の笑みが深くなる

「……願ってもないな」

30分ほど経って車がやっと止まり、カズヤと篠宮は車外にでた

そこは既に室内で、シャンデリアや彫刻で彩られ、床には絨毯が敷いてある

その上に、何台もの高級車が停まっていた

「ここはどこだ、って聞かないのかい？」

篠宮が笑いかける

「大体察しはついてるよ。ここでギャンブルをやらせようってんだろ？」

カズヤは少しも動じない

「ここまで察しがいいと怖いな」

篠宮が頼もしそうに笑った

「で、その催しとアンタの関係は？」

篠宮は部屋の奥へと進みながら答えた

「金持ちって、退屈なんだよ」

篠宮は奥の豪華な扉から出ていき、入れ違いに男が入ってくる

「黒スーツにサングラス……」

そのオーソドックス過ぎる見た目に苦笑が漏れる

「カズヤ……だな？ついて来なさい」

カズヤは黒スーツに促され、篠宮とは違う扉から出て行った

「成る程、お前はどちらかと言えば“狩る側”か」

さつき後にした部屋と同じくらい豪華な廊下を進みながら、黒スーツの男が話し掛けてくる

「狩る側？」

「…いや、失言だった。この部屋だ」

辿りついた部屋は、恐らくは一人用の個室と思しい質素な場所だった。質素とは言えど、一般的なホテルのようなオシャレさで、鏡とソファ、そして部屋の中心に大きなテーブルがある

「ここですばらく待っている」

黒スーツが部屋を後にし、ドアにカギがかけられた

「カギまでかけやがって…」

ぼやきながらカズヤは現状を確認する

ケータイは圏外

ドアは取っ手がなく、こちらからは開けられないようだ

天井にスピーカーと監視カメラを見つけ、何かあれば分かるだろう

とソファに寝転んだ

それから3分ほどして、スピーカーが軽い電子音を吐き出して声を
出す

「お集まりの皆様、本日はご来会頂き、誠にありがとうございます
！」

どうやら別に会場があって、ギャンブルをする参加者を見て楽しむ
ようなものなのだろう

「遂に始まります。G・ダービー。！今年も100名余りの若者が、
夢を求めて辿りつきました！」

会場から、マイクを通して歓声が響く

「果たして見事優勝し、賞金1億円を手にするのは誰なのか!？」

「い…1億!！」

カズヤが思わず大声をあげる

それは他の参加者も同じようで、どよめきが反響してフロア中に広
がっていた

カズヤは冷静になろうと、頭を整理する

一体、篠宮は何者なんだろうかということ

うまくやれば、このようなチャンスがまた巡ってくるだろうと

そして大金が絡む以上、ギャンブルに「殺し」が関わるであろう」と

「ではここからは、参加者の皆さんに呼びかけます」

同じタイミングで、ドアのカギが開く音がした

「皆さんにはこれからギャンブルをして貰うワケだけでも、この“G・ダービー”のシステムを説明するから良く聞くように」

急に空気が重くなるような気がして、カズヤは身構えて聞く

「まずは予選を行います。こちらの会場には電光掲示板があって、君達一人一人をモニタリング出来るようになってるから頑張っ

嫌に気さくな声にイライラしながら次の言葉を待つ

「これからやるゲームは対一で闘うことになり、勝つと5ポイントが貰えるワケです。負けてもポイントは減りませんからご安心を。…この予選を勝ち抜くには、15ポイントが必要となります」

成る程、恐らく時間内に3勝しろということらしい

「それで、皆さんには“行動する”か、“待つ”かを決めて貰います」

再び、参加者の間で動揺が広がるのを感じた

「これからゲームをやるにあたって、自分の部屋で待つか、相手の部屋に出向くか。君達はそれを選ぶことが出来る。」

司会は続ける

「自ら相手の部屋に出向いた参加者には、無条件で10ポイントをやるっじゃないか」

今度は部屋のテーブルから湧いた音がして、引き出しが開く

「ゲームに使うカードは待つ側の部屋のものを使う。待つって参加者はじっくりカードでも見ているがいいさ。…じゃあ制限時間は1時間、よーい、ドン！」

雄叫びと共に、勢いよくドアを開ける音がそこから中で響く

「なるほどねえ、部屋を出た奴は1勝でいい。部屋に残る奴は…」

カズヤは引き出しの中の4枚の、トランプ大のカードを引っ張り出す

「イカサマ上等、ってワケだ」

第9話：参加（後書き）

頑張っ て書いておりますけども

最近何より、感想がほすい…

こんな小説書いてる人が少ないので
これでいいのか凄く不安なのです

お暇なひとは是非

第10話：ガンマンゲーム（前書き）

遂に、半年かけて、やっと！

10話です。

前回カズヤがギャンブルをしなかったので

凄いスピードで書きました。

頑張れば出来るもんですね。

第10話：ガンマンゲーム

「さて、どうしたもんか…」

カズヤは割と冷静だった

相手側に出向けば労せずに10ポイント

部屋で待てば色々といカサマが出来る

「…行くか」

カズヤは自ら出向くことにした

こんなところでグズグズと考えるよりは、まず行動した方がいい

第一何人が出向くか、何人が待つのか分からないのでは、そもそも
対戦相手が来ないかもしれないじゃないか

カズヤは手ぶらのままで扉に向かう

扉はすんなりと開いた

「カズヤくん、プラス10ポイント!」

スピーカーから声が響いた

それを待っていたかのように、他の部屋からも次々に参加者が出てくる

「なんだ、俺が最初に出て来たのか」

カズヤは初めて他の参加者を見た

少なくとも今廊下に出て来た奴らは皆高校生位で、女よりも男が多い殆どの者は、不安そうにキョロキョロと周りを伺っている

数人、余裕そうな面持ちで辺りを観察している奴がいた

恐らくカズヤと同じような身分なのだろう

「それにしても…一体何人出て来るんだ？」

扉が規則的に並ぶ狭い廊下には、ものの一分の内に大量の人で溢れていた

(おいおい、殆どの参加者が出てしまったらどうなるんだ?)

不意に、カズヤの心配を察したかのようなタイミングで、スピーカーからブザー音が鳴った

(はい、部屋を出た参加者が70名になったので、あとの30名は部屋から出られません)

明るく事務的なアナウンスが廊下を沈黙に落とし、またどよめきが広がる

頭のキレル参加者はすぐに、まだ参加者のいる部屋に飛び込んだ

100人いる参加者の中で、..今すぐ..勝負を出来るのは、実質60人

それ以外は廊下で待たなければならない

部屋に残った参加者は3勝しなければならぬから、こつなるのは当然だろう

カズヤは、機転の効いた参加者の一人だった

とっさに引つ張ったドアの向こうには、運よく参加者がいた

室内はカズヤのいた部屋と変わらない

既にテーブルに掛けている男は、学校の制服に眼鏡で頭が良さそうに見える

黒髪の短髪で、このような場所じゃなければ普通の爽やかな学生だろう

落ち着いた態度で男は話し掛けてくる

「どうも。早速だけど始めようか…僕は3勝しなきゃならないんだ」

カズヤが無言で同じテーブルに腰を下ろす

同時に、テーブルの端にあった機械から一枚の紙がプリントされて出て来た

「どうやらゲームのルールのようなだね」

男はプリントを取り、目を通しながら話し掛けてくる

「僕は黒瀬。きみは？」

カズヤも名前を告げ、黒瀬の次の行動を待った

「なるほど、そういうゲームだったのか」

黒瀬はそう呟くと、机の中にあつたカードを3枚、カズヤに寄越す
伏せた状態のそのカードはまんまトランプだが、裏返して絵柄を確
認する

“ショット”、“リロード”、“ハイド”と書かれた、それぞれ違
うカード

ちょうどトランプの絵札のように、銃・弾丸・隠れる人が描かれて
いた

「じゃあルールを説明するよ」

：ガンマンゲーム：

・お互いに手札を持ち、一枚を選んで机に伏せ、同じタイミングで
公開する

・「リロード」のカードで弾丸を補充しないと「ショット」のカー
ドは使えない

・ジャンケンの要領で、相手がリロードのカードを出したときに自
分がショットであれば勝ち、先に2勝した方が勝ち

・どちらもショットのカードだった場合はお互い残弾数が減り、ゲーム続行

・「ハイド」のカードでショットを防ぐことが出来る

・リロードで弾丸を6発補充することでも勝利となる

「つまり、ハイドのカードで攻撃を防ぎつつ、スキをついてリロード、そのリロードを狙ってショットをすればいいってことだろうね」

黒瀬がルールの書かれた紙を退かす

「早速、始めようか」

カズヤは自分のカードに目印がついてないか確認し、手に持ってシヤッフルする

「ああ……」

カズヤはこういう、記憶力が関係ないゲームが苦手だった

出来るとすれば、相手の残弾数を正確に把握出来るくらいだ

極めて静かに、**“ガンマンゲーム”**が始まった

相手の顔は見ずに、落ち着いた体裁を取り繕いつつ、カードを混ぜる

嫌に緊張感のないゲームだった

室内に二人きり、ということもあり

ここで負けても大丈夫というルール性もある

(最初はリロードだろうな……)

一回目は撃つタマがないので、必然リロードだろう

分かりきっているが、手札からリロードのカードを選び、机に伏せる

「オープン」

下手に勿体振らず、同時にカードを開く

当然、お互いのカードはリロードだった

カードを手札に戻し、机の下でシャッフルする

問題はここからだ

いよいよ安全地帯から抜け、戦略や騙し合いが起こるだろう

そんなことを考えている内に、黒瀬が先にカードを伏せる

「今伏せたカードは……リロードだ」

…そら、来た……

カズヤの顔が、これがギャンブルであることを思い出したように強張る

ちょうど、ババヌキで一枚のカードだけを上に引き上げたような、単純な、しかし深い二択

カズヤはそれほど悩まずにカードを伏せた

「フフ……」

開かれたカードは、またどちらも「リロード」

やっぱりか…

黒瀬は、自分の思い通りになったことを喜んだ

“リロード”を宣言した相手を信じず、

しかし強さを誇示しようと、リスクのあるリロードを出してくる

全く平凡なプレイヤーだ…！

ジャンケンのように直感的ではなく、下手に考える時間があると、頭のいい奴ほど「パターン化」するものだ

黒瀬はまた先にカードを出した

「今度は、シヨットだ」

黒瀬はまたも、伏せたカードを「宣言」する

例えれば、先程は手を挙げて「武器は持っていない」と言ったようなもので、

今度はモデルガンか実弾銃か分からない武器を向けた状態とでも言えよう

人間は、音声や物質で、直接的に認識したものを深刻に考える傾向がある

今「ショット」と口にしたことで、相手が「リロード」を選ぶ道を塞いだ

よって、相手が…カズヤが出したカードは

「ハイド…だろ？」

カードを伏せ終えたカズヤに黒瀬が高圧的に言い、自ら互いのカードをめくる

「やっぱり、ハイドだ」

カズヤは予想通りハイドのカードを出した

しかも黒瀬のカードは

リロードだった

読める…！

コイツの思考…！

「きみはいつもそんなに無口なのかい？」

不気味なほどニッコリしながら、黒瀬はテーブルの引き出しにある「秘密兵器」を奥に押しやった

第10話：ガンマンゲーム（後書き）

この話でやっていたガンマンゲームは、ジャンケンのように出来ます

シヨットはカメハメハのポーズ

リロードは拳を握って胸の前で突き合わせる

ハイドはガードに置き換えて、拳を握って胸の前でクロス

これをジャンケンのようにテンポよくやります

小学校で流行ったゲームです

面白いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4314i/>

賭博伝説 カズヤ

2010年10月10日03時26分発行